

核のゴミをぜん管理

東海再処理施設 解体に高い壁

貯蔵プールに乱雑に投入された放射能廃棄物入りのドラム缶、敷地内に残された中身のよくわからない廃棄物容器……。廃止が決まった原発の使用済み燃料再処理工場「東海再処理施設」（茨城県）を11月上旬に訪ねると、ずさんな廃棄物の管理や老朽化した施設の様子から、解体作業が極めて難航しそうな状況がわかってきた。

腐食ドラム缶 ■ 中身不明の容器

使用済み燃料の再処理で出た廃棄物をプールなどで貯蔵する「高放射性固体廃棄物貯蔵庫」。11月7日、日本原子力研究開発機構の担当者が施設の前でプール内の状況を写真で説明した。水が濁ったプール内には、廃棄物入りのドラム缶が約800個、乱雑に積み上げられている。ドラム缶の山の

高さは約7メートル。水中カメラを近づけると茶色い物体が舞い上がったという。「水あかか、さびなのかわからない」

ドラム缶の中身は、バラバラにした使用済み燃料の被覆管だ。1977〜94年に投入された。つり下げたワイヤを切って投入したといい、プール内でワイヤが

複雑に絡み合っているときみられる。ドラム缶が腐食し、廃棄物が漏れている可能性も指摘されている。

水面の放射線量は毎時3マイクロシーベルト。一般人の1年間の追加被曝限度の3倍

を1時間で浴びる数値だ。水の浄化装置はない。

また、敷地内には中身がよくわからない廃棄物の容器が多数あるといい、ふたを開けて分別し直す必要があるという。原子力規制委

完了まで70年 処分先は未定

原子力機構は11月30日、東海再処理施設の廃止が完了するまでに70年かかると、当面10年間に約2170億円かかるこの工程を規制委に報告した。

だが、作業は簡単には進みそうにない。高放射性固体廃棄物貯蔵庫のプール底のドラム缶について、原子力機構は「取り出しを考慮していなかった。今後、装置を開発して、水中でワイヤを切りながら一つずつ

持ち上げる方針だ。施設そのものも汚染されている。使用済み燃料を粉々にした施設の内部の放射線量は毎時200マイクロシーベルト。試験運転を始めて以降、誰も入ったことはない。

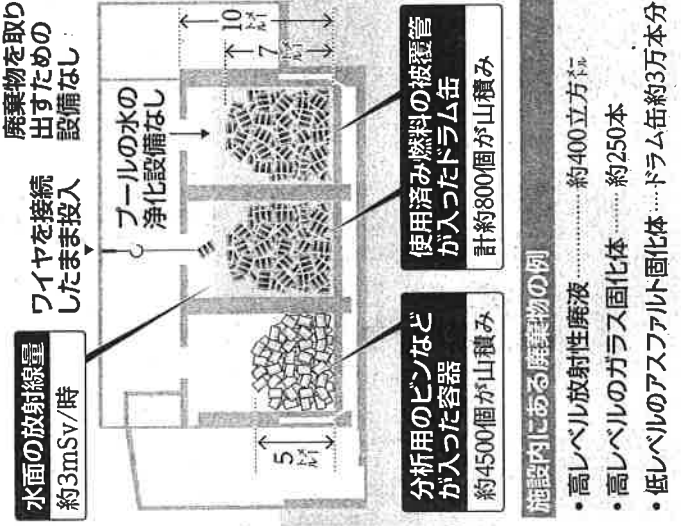
機器や設備の解体が進んだとしても、廃棄物の処分の問題が残る。その時期や場所も見通せない。

最も放射能の強い高レベル廃棄物は、地下300メートル

の深い場所に10万年間埋め、国が処分先を決めることになっている。政府は年内にも処分に適した場所を「科学的有望地」として示す方針だ。だが、それも処分地探しの第1段階に過ぎない。処分地の候補となる自治体が見つかっても、本格的な選定調査には少なくとも20年かかる見通しだ。処分先が決まらなければ、廃棄物は施設で保管し続けるしかない。（東山正真 杉本豊



高放射性固体廃棄物貯蔵庫のイメージ



東海再処理施設

原発の使用済み燃料を再処理してプルトニウムを取り出す技術を得るために、約1900億円かけて建設された。1981年に本格運転を始め、原発約10基分に当たる1140トンの燃料を処理した。97年に廃棄物のアスファルト固化施設で爆発事故が起きた。2014年に廃止が決まった。運営する日本原子力研究開発機構は、高速増殖原型炉「もんじゅ」の運営主体でもある。



員会の担当者は「とても適当とは言えない状況が続いている。原子力機構だけでなく、旧科学技術庁も旧原子力安全保安院も見えて見ぬふりをしてきたと話す。

このほか、極めて放射能の強いガラス固化体が約250本、低レベルの濃縮廃液が約3千立方メートル、低レベルのアスファルト固化体がドラム缶約3万本分ある。

最もやっかいなのが、再処理の際に出た約400立方メートルの高レベル放射性廃液だ。人間が近づくと数十秒で死する線量だ。放っておくと自ら発熱して水素が発生し、爆発する危険があるため、換気や冷却を続けなければならない。